

日本の歴史 33

ジョン万次郎：
幕末日本を通訳した男

永国淳哉編（新人物往来社 2010）

本書の請求記号 289.1||Jom

稲垣 宏行

天保12（1841）年、土佐（現・高知県）の漁民の子、ジョン万次郎（中浜万次郎）は14歳の頃、乗っていた漁船が嵐に遭い難破し、伊豆諸島の鳥島に漂流しました。その半年後、通りがかった捕鯨船ジョン・ハウランド号の船長ホイットフィールドに拾われアメリカへ渡り、11年後に日本へ帰国。到着した琉球（現・沖縄県）で取調べを受けましたが、当時、琉球と朝貢関係にあった薩摩（現・鹿児島県）の藩主、島津斉彬の理解もあって許され、紆余曲折の末、土佐に帰郷しました。

万次郎は11年間で地球7周に及ぶ航海をしたと郷土研究家の編者は述べています。彼の乗った船は主に捕鯨を目的として太平洋を中心に航海しましたが、アフリカ南端の喜望峰を通過して太平洋まで戻ったことも2回ほどありました。この時代には蒸気船もありましたが、万次郎らの船は大型帆船です。蒸気船ほど安定した速度は出ず、嵐で大破する危険性も低くはなかったはずです。旅客機で海外旅行が可能な現代でも、日本からハワイまでは8時間かかります。その間、機内でじっとしていなければなりません。帆船の場合、補給などで陸地に停泊することはあっても、数日間、船内にいることは珍しくないはずです。しかも、四方はいつ荒れるかもしれない海。過酷な環境下にありながら、地球7周と言われるほどの距離を航海した万次郎の精神力は並ではありません。しかし、彼の偉業は航海だけではありません。

万次郎はホイットフィールド船長に拾われてからの3年間、彼の故郷アメリカのマサチューセッツ州フェアヘブンで暮らしたこともあり、船長宅の農業の手伝いや街で樽作りのアルバイトをするなど苦学をしながら学校に通い、優秀な成績を修めました。無事日本に帰国してからの安政6（1859）年には、本書によれ

ば日本最初の英会話書となる『英米對話捷徑』^{えいべいたいわししょうけい}を訳しました。

本書には前掲書から一部抜粋した英単語とその発音、意味とが記載されています。「Father（フワサ）」「Children（チリレン）」「speak（スパーカ）」のように、我々が知る発音と異なっています。しかし、発音自体は英語圏の人々のそれとむしろ近く、本書でも指摘されているように「生の発音」です。寺子屋に通う余裕すら無いほど貧しく、海外の知識が全く無くともこれだけのことを成し得たのは、ひとえに彼の強靱な精神力と貪欲な好奇心の賜物だと思えます。

万次郎の功績は、坂本龍馬、吉田松陰、後藤象二郎など幕末期に活躍した人々に大きな影響を与えたと言われています。しかし、彼の功績を広く世に知らしめたのは、川田維鶴（河田小龍）が彼の証言を元にして嘉永5（1852）年に記した『漂異紀略』^{ひょういぎりやく}であり、それを取りあげた土佐藩主の山内容堂（豊信）^{とよしげ}です。彼らの存在がなければ、万次郎は忘れ去られただろうと編者は述べています。

万次郎はある意味、龍馬たち明治維新の功業者以上の偉人です。しかし、そんな彼でさえ、自身を理解し支えてくれる第三者の存在が無ければ成り立たなかったのです。そもそも当時、異国船打払令が発令中だった日本に帰国することすら、開明的な島津斉彬の理解が無ければ叶わなかったのかもしれないのです。当たり前と言えそうですが、我々が偉人を知る上では、その偉人を支えた人々の存在も蔑ろにはなりません。本書に目を通すと、万次郎の功績に驚かされると同時に、そのことも忘れてはならないと感じました。

いながき ひろゆき（司書・情報サービス課）